

悪 霊 第九部・私刑の夜

悪
霊
第九部・私刑の夜

【登場人物】

伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……………党員。ハウスキーパー
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国し党中央委員になる
佳代……………貧しい農家の娘。安藤澄の女中
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
韓愛子……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
李麗姫……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
リヒャルト……………ドイツの新聞記者。ソ連のスパイ。
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
朴正烈……………朝鮮人青年
村野栄太郎……………左翼の学者。党中央委員長
畑野達男……………労働者出身の党中央委員
小泉俊吉……………農民出身の党中央委員
清水……………労働者出身の党中央委員
岩本……………大学出身の党中央委員。文芸評論家
赤間……………大学出身の党中央委員
大河原章雄……………子爵の令息。
野島二郎……………男爵の令息。

石川加奈子……………銀座のビアホール女給。リヒャルトの愛人
花江……………華族の令嬢
松子……………華族の令嬢
朴美峰……………朴正烈の妹

【時・場所】

昭和八年（一九三三）七月～十一月。東京。

昭和八年の夏七月、朝の十一時。

蒸し暑さに耐えかね、猪俣佐和子は台所の窓を開けた。江戸川から涼しい風が吹きこんでくる。顔をあげ、額から顎にかけて流れる汗をぬぐった。

奥の六畳間からかすかに、呻き声と衣擦れの音が響いてきていた。佐和子は、ちらりと奥のほうを一瞥し、鼻を鳴らした。

愚物……。

奥の部屋では、最前まで仰向けに寝て足を開き、むき出しになった股間を佐和子に蹴らせていた村野栄太郎が、布団のなかで自らの陽物を手でしごいているはずだった。村野は、女性に辜丸を痛めつけられないと勃起しない異常体質の持ち主であった。勃起した後は自慰に耽るだけで、佐和子には指一本触れようとしめない。佐和子も、触れられなくなかった。

銀行強盗に失敗し、仲間を見捨てて逃げた自分が、咎められることもなくすんでいるのは、中央委員長の村野が、自分を側に置きたがっているからだということは承知している。だが、モスクワから帰国して中央委員に任命された貴代美と再会して以来、押し殺してきた村野への嫌悪感が日に日に膨れあがってくるのを、押さえようもなかった。

——貴代美ちゃんに逢いたい。

あのふくよかで、柔らかな胸に顔を埋め、抱きしめられたい。その思いは募るばかりだが、顔

を合わせることさえままならなかった。

ハウスキーパーである佐和子が、村野の家を出るのは近所に買い物に行くときくらいだ。一方の貴代美は自分の活動で忙しい。村野の家に行くのは、月に一、二度開かれる中央委員会の時だけだ。そして、佐和子には委員会に顔を出す資格はない。貴代美と顔を合わせるのは、出迎えや見送りをする際の、ほんの短い時間だけだ。

痛……。

台所から自室に向かおうとして、右足の親指に鈍い痛みが走った。見下ろすと、爪の先端が割れている。素足で村野の辜丸を蹴ったときの傷のようだった。

佐和子は舌打ちし、薬箱から軟膏を取り出して塗りながら、いまいまいげに首を振った。最近、村野の辜丸が固くなったように感じられる。労働者の掌が齢を重ねることに固くひび割れていくのと同じ事が、佐和子に足蹴にされるうちに、村野の辜丸にも起こっているのだろうか。

いっそ、潰してやろうかしら。何度、そう思ったか分からない。この辜丸を蹴り潰して殺してしまえば、この薄気味悪い変態から解放される……。

三日前、村野がまた、ねだつてきた。佐和子が村野の部屋に入ると、村野は布団に仰向けになり、着物の前をはだけて性器をむき出しにしていた。これまでは禪か猿股を付けていたのに、直接蹴ってくれという。佐和子は最初は戸惑い、やがて怒りがこみあげた。つい力をこめて蹴った。村野は絶叫し海老ぞりになった。陽物の先端から血が噴き出した。村野は怒号を発しながら、両手で股間を押さえて七転八倒した。

潰したのかしら……。

佐和子は狼狽し、部屋を飛び出して台所にうずくまった。

佐和子がこれまで「去勢」した男性は三人。北海道日市にいたころ、伊集院満枝と婚約中にもかかわらず醜業窟に通う川名昭一郎の辜丸を握りつぶした。翌日、昭一郎は死体で発見された。横浜のカフェで声をかけてきたモダンボーイの股間に膝蹴りを浴びせ、蹴り潰したこともあった。彼がどうなったかは知らない。芝浦の倉庫街で、五郎という与太者の辜丸を踏み潰したのは、なぜか彼女を追いかけてきた安西小百合という見知らぬ娘の目の前だった。五郎はやはり翌朝には死体となっていた。

もし村野が死んでしまったりしたら……。最近、「党」内部でしきりと査問が行われ、スパイの容疑をかけられた党員が除名処分になっていることは耳にしていた。「党」を追われたら、それこそ行くところはどこにもない。

だが、それは杞憂だった。やがて漏れてきた呻き声にそつと襖を開けると、村野は血まみれの布団のなかで陰茎をしごいていた。ばかばかしくなった。

「ごめんください」

物思いに耽っている、玄関のベルが鳴り、八百屋の御用聞きのような声音が聞こえてきた。

はい。佐和子は、顔をしかめつつ、声だけは明るく御用聞きを迎える主婦のように作って、玄関へと向かった。

格子戸を開けると、職人ふうの格好をした浅黒い小男が立っていた。出迎えた佐和子を見ると、口を大きく開け、隙間だらけの歯並びをみせて笑った。

佐和子は、背筋に悪寒が走るのを覚えた。

「いるかね？」

あばただらけの醜い顔に、好色な眼差しを浮かべて、男は問うた。

「はい」

佐和子は頷き、どうぞ、と頭を下げた。小男は室内に上がり、頭を下げる佐和子の側をすり抜け、ふくらんだ腹を突き出しながら奥の部屋へと向かった。佐和子は舌打ちして後を追った。応接に使っている殺風景な六畳間に入ると、小男はどっかと腰をおろし、扇子を広げてばたばた動かしながら佐和子を見上げ、「早く、冷たい茶くらい出さないよ」と笑った。佐和子は無言で部屋を出た。台所で冷やしていた薬缶の麦茶を茶碗に注いだ。

佐和子は、その来客が嫌いだ。小泉俊吉という、農家の次男坊で最近中央委員になったばかりの三十男は、他の中央委員に対しては腰が低く、吃音ぎみの口調で歯の浮くようなおべんちやらを使うくせに、ハウスキーパーの佐和子はおろか、同じ中央委員であるはずの貴代美に対してさえ、どこか見下した、それでいて好色な眼差しを向けてくる。

かつて戦鬪的技術団で抜群の成績をあげていた自分が、なぜあんな下品な醜男に顎で使われなければならないんだろう。さらに荷立ちが募った。佐和子は、流しの隅に放ってあった雑巾を取り上げ、麦茶を入れた茶碗の上で絞った。

お盆に茶碗を載せて六畳間に運ぶと、すでに村野も布団から出て小泉と向かい合って座っている。小泉はお追従笑いを浮かべ、しきりと頭をさげて村野の話に相槌を打っている。小泉の前に汚水入りの茶碗を置き、お辞儀をして六畳間を出て、四畳半の村野の部屋に入った。饅えた匂

いが鼻をついた。佐和子は、呼吸を止め、嘔吐しそうになるのをこらえながら、閉めきられていた雨戸を開け放った。庭から吹き込む風で、籠もっていた臭気を追い払った。

ほっと一息ついていると、ふいに柔らかなからだが背後から、佐和子を抱きしめた。おさわちゃん。

耳元で囁かれ、佐和子の胸元に差し出された腕をぎゅっと握りしめながら、顔だけ振り向いた。貴代美の笑顔がそこにあった。大柄な貴代美は、かがみ込むように顔を寄せ、佐和子の唇に自分の唇を重ねた。

あたたかい……。佐和子は胸の裡でそう呟き、涙が溢れそうになった。踵を返して貴代美に向かい合い、強く抱きしめ返した。

貴代美は優しく佐和子を愛撫し、それから体を離し、残念そうな顔で、応接の六畳間のほうに目配せした。今日は、中央委員会が開かれることになっている。だから貴代美はやってきた。それでも僅かな隙を見て、抱きしめてくれた。そのことが嬉しくて堪らなかった。

やがて、他の中央委員も次々と現れた。帝大出のエリート黨員である岩本と赤間は、出迎えた佐和子にも、先に来ていた貴代美にも露骨に嫌な顔をしてみせた。労働者出身の濃厚な清水は快活な声音で挨拶し、同じく労働者出身の畑野達男は静かに唇の端に笑みをにじませた。

委員が揃い、淡々と会合が始まった。いくつかの議題を話し合う間、貴代美はずっと居眠りをしていた。

その日の議題がほぼ片づいた頃、委員長の村野がふと「赤間くん」と、いくぶん遠慮気味に声

をかけた。

「最近、お金が入ってきてないのだが」

「はあ……」

財政部長の肩書きを持つ赤間は、そっと岩本と目を合わせた。当局のスパイだった三沢の誘導で美人局やギャング事件を引き起こし、「党」は大打撃を受けた。岩本や赤間の提案で、以後、恐喝など犯罪じみた手段で資金を集めるのは中止となった。かわりに赤間が責任者となってカンパを募ったが、はかばかしく集まらない。

「なんとかならんのかね」

もってまわった言い回しで弁解する赤間と岩本に、村野はしびれを切らしたように言った。

「このままでは、薬を買う金もないんだ。死んでしまうよ」

「赤間さん」

黙って聞いていた畑野が口を開いた。

「どうだろう。黨員だって生活は楽じゃない。大陸での戦争でボロ儲けしているような輩からだったら、多少不正な手段を使って金をいただいても、罰は当たらないのじゃないのかね？」

「何を言うか！」

岩本が怒鳴った。

「君はもう忘れたのか？ まんまとスパイに騙されて、破廉恥な事をやった挙げ句、党は破滅寸前まで至ったんだ。また同じ轍を踏めと言うのかね」

「その党をここまで元通りにしたのは……」

いつの間にか目を覚ましていた貴代美が口を挟んだ。
「誰のおかげだと思ってるの？」

「いきなりなんだ！」

岩本はきつと貴代美を睨んだ。

「ずっと居眠りしていたくせに。頭が悪くて議論についてこれないなら、ずっと黙ってろ」
「あのサ……」

貴代美は、冷たい眼で岩本を見つめて静かに言った。

「モスクワでは、あたいたちの党がなんて言われていたか、教えてあげようか？」
モスクワ、の一言に一同は息を呑んだ。

「スパイに頼らなきゃ自力で金も稼げない組織をなんとかしてくれ、と言われて帰ってきたんだよ、あたいは」

男たちの面差しが強ばった。モスクワ、すなわちソビエト連邦政府の評価は、彼らには絶対だった。貴代美は続けた。

「あたいの知るかぎり、畑野さんがいちばん、人集めもお金集めもできると思う。じり貧になりたくなきゃ、畑野さんに財政部長になってもらうしかないんじゃないの？」

そう言って貴代美は村野を見やった。自分の一言が引き起こした陰悪な騒ぎに、村野は俯くばかりだった。

「貴様！」

岩本が立ち上がった。

「女工上がりが、赤間くんを財政部長失格だと言いたいのか？」

貴代美が立ち上がった。面差しから血の気が引いていた。また言いやがったな。そう呟き、ゆつくりと岩本に歩み寄った。女工上がりと……。

「岩本さんも飯島さんも、やめてください！」

清水が二人の間に割って入った。

「今は党にとって危急存亡の時なんです。仲間割れはまずいですよ」

「飯島くん、だいたい君は失敬だよ」

小泉も立ち上がり、貴代美に詰め寄った。

「新参者の女のくせに、なんて態度だ。岩本さんに謝りなさい」

「ふざけんな、百姓」

貴代美は小泉の胸ぐらを掴んだ。右足がすつと後ろにひかれた。

「だめです！」

貴代美は小泉の股間を蹴り上げる気だ。それに気づいた清水が面差しを泣き出しそうに歪めて、貴代美の腕に取りすがった。

「お願いします。私に免じて、ここは……」

貴代美はしばし清水を見つめ、わかった、と呟き、ためえ運がよかったな、と小泉に囁いてその場に座り、座ってから大声で笑った。一同があっけにとられて貴代美を見つめる中、貴代美は言った。
「いい事、思いついた！」

な、なんだね……？ 村野がおそるおそる問うた。

「畑野さんと赤間さん、二人とも財政部長になればいいじゃん」

それで、どっちがお金をたくさん集められるか競争すればいいよ。な、いい案だろ？

「よし、わかった！」

赤間が顔を真っ赤にして叫び、村野の前で両手をついた。

「今日かぎり、ぼくは財政部長を退任します。ぼくにはつとまりません。後は、畑野くん任せます！」

それで中央委員会は散会となった。近所に怪しまれぬよう、一人ずつ時間をあけて、目立たぬように帰る。貴代美はいの一番に、おじやま様でしたアと声をあげ、玄関に向かった。残された男たちは、気まずそうに目を合わせなかった。

玄関で靴を履いていると、佐和子が見送りにきた。人目がないのを確かめて、佐和子を抱きしめて接吻した貴代美は、もう長くはねエな、と呟いた。なにが？ 訝しげに問う佐和子に、いたずらっぽく笑って右眼をつむって見せた。

十五分後。

村野の隠れ家の格子戸がそつと開けられ、岩本が顔を出した。周囲を注意深く見廻し、人けがないことを確かめてから烏打ち帽を目深にかむって歩き出した。

最初の角を曲がった時、不意に背後から襟首を掴まれた。薄暗い路地に引きずり込まれ、塀に押しつけられた。誰だ？ 岩本は恐怖に震えながら呻くように問うた。特高か……？

あたいだよ。

貴代美の声だった。仰天して振り向いた岩本は、大きく眼を見開いた。寧丸に重い衝撃が走った。貴代美の膝が、岩本の股間に食い込んでいた。

「痛てエか？」

貴代美は、崩れ落ちかけた岩本の胸ぐらを掴んだまま、笑った。岩本は、水槽から放り出された金魚のように口をばくばくさせている。

「これでも手加減したんだぞ。ひと蹴りで二つとも潰せるよう、訓練を受けてきたんだから」

それから、謝れ、と囁いた。岩本は幾度も頷いたが、声を出すこともできなかった。貴代美は、平手打ちをひとつ食わせて言った。

「今度、女工上がりと言ったら、おめえのきんたま、二つとも潰すからな」

一時間後。

東京駅に程近い丸の内に聳える八階建てのビルディング。その四階にある事務所のドアの脇に、Frankfurter Allgemeine Zeitung と刻まれた鉄の銘板が打ち込まれていた。アルファベットの下に「Frankfurter Allgemeine Zeitung」と刻まれた鉄の銘板が打ち込まれていた。アルファベットの下のドイツの有名な新聞である。

事務所の中にはいくつかのデスクが並んでいるが、記者たちは出払っているのか、事務員と見受けられる初老のドイツ人がぼつんと座って雑誌を読んでいるだけで、閑散としていた。ただ、事務所の奥に「Bürooberhaupt (支局長)」と磨りガラスに黒く書かれたドアがあり、その内側か

らなにやら吐息のような音が漏れ、人が蠢く気配が漂っている。

「こんにちは！」

明るい挨拶とともに入ってきたのは、貴代美だった。

「こんにちは。貴代美さん」

初老の事務員はにっこりと笑い、立ち上がって貴代美を出迎えた。

「いる？」

貴代美が親指を立てると、事務員は奥の支局長室を見やり、肩をすくめ小指を立てた。

「尺八、かあ」

日本語で苦笑する貴代美に、事務員は怪訝な顔を見せた。貴代美は、親指を口にくわえ、頭を前後に振って見せた。事務員は大笑し、コーヒーをついでくれた。

「リヒャルトの奴、昼間から……。よほど好き者だね」

香りのよいコーヒーを呑んでいると、やがて、太い男の呻き声が聞こえてきた。終わったみたいだね。貴代美は呟いてカップを置いて立ち上がり、支局長室のドアの前に立った。

ドアが開いた。出てきたのは、派手な洋装に化粧の濃い、二十歳前半くらいの日本人女性だった。唇の端に、わずかに白濁した液体がついている。

「ちゃんと拭きな」

軽く頭を下げて出て行くとする女に、貴代美は笑顔でハンカチを差し出した。眼を見開き、手の甲を唇の端にあてた女は、顔を真っ赤にして走り去った。肩をすくめて苦笑した貴代美が支局長室のドアを開けると、鼻をついた匂いに貴代美は「わっ」と叫んだ。

「こんにちは」

窓から外を眺めていた、ワイシャツにサスペンダー姿の長身の白人男性が、パイプを手に振り向いた。

「同志ナージャ」

流暢なロシア語だった。貴代美は顔を顰めたまま、やはりロシア語で返した。

「同志リヒャルト、なんて匂いなの！」

三年前の昭和五年五月、「党」の指令で計画された武装メーデーが不発に終わった直後、貴代美はモスクワに渡り、東洋からの留学生が集まる極東労働者共産大学に入学した。ナージャとは、留学時代に使っていた変名である。

リヒャルトという名のベルリン生まれのドイツ新聞東京支局長が、なぜロシア語で喋っているのか、なぜモスクワ時代の貴代美の変名を知っているのかは、おいおい語ることにする。

「これは失礼した」

リヒャルトは日本式に頭を下げ、来日する前に二年ほど滞在していた上海で仕入れたらしい、孔雀の絵が描かれた絹製の扇を振って、室内の空気を開け放った窓の外に追いやった。

三十八歳。黒々とした頭髪に、広く秀でた額、太く吊り上った眉、鋭い視線を放つ二重瞼の青い眼、長い鼻梁の鷲鼻、引き締まった唇。なるほど、大勢の女たちが夢中になるのも無理はない……と貴代美は思った。ただし、男性に興味がなく、部屋に漂っていた精液のほのかな匂いにすら拒否反応を覚えるという貴代美が、彫りの深い面差しに白人男性が放つ色気に、惑わされ

ることはない。

「すまないが、昼食がまだなんだ。食べながら話をしてもよいかね？」

相変わらずロシア語で言いながら、リヒャルトはデスクに置かれたバスケットの蓋を開け、葡萄酒の小壺、スープ入りのアルミニウム容器、黒パンにハム、チーズを取り出しデスクに並べた。さきほどの部屋から出て行った女性が出てきたものだ。女性は、銀座にある有名なドイッ料理店のウエイトレスで、名前は石川加奈子。出前の昼食を運ぶ度に「尺八」で奉仕したり、暇があるときは情事に及ぶこともしばしばだということは、貴代美も承知していた。

「あなたのぶんの昼食も取り寄せようか？」

西洋人らしく気を遣うリヒャルトに、貴代美は微笑んで首を振った。こういうところが、日本の女たちが彼に夢中になるところなのだろう。

「いいえ、結構よ」

貴代美は、もう済ませたから、とデスクの前に向かい合って並べられた来客用のソファに腰をおろした。リヒャルトは、ワインの小壺を開けて一口のみ、黒パンにチーズを塗りながら言った。「ところで、君たちの党は、どんな状態だね？」

「どうにもならないわ」

貴代美は肩をすくめた。

「病弱な委員長は指導力ゼロ、大学を出たインテリ党员と、労働者出身党员の軋轢は深まるばかりよ。資金は枯渇し、党员は減る一方」

「ふむ」

「だから私は、党の再建を手伝えと命じられて帰国したわけだけど、正直言って、お手上げね。ここまでひどい状況だとは思ってもみなかったわ」

「君はどう思う？」

ハムにナイフを入れながら、リヒャルトは問うた。

「日本の党が再建できる方法はあるか？」

「インテリ党员を全員、粛清するしかないわね」

貴代美は平然と言った。

「労働者出身の党员には、まだ、見込みはあるけれど、理屈っぽいインテリ党员に任せておいたら、現状はとも変えられないわ。労働者党员をけしかけて、何人かは除名にしたけれど」

「なるほどね」

リヒャルトは、瞬く間に昼食を平らげ、デスクを立ててソファに向かい合って座った。

「君は、モスクワで尋問の訓練を受け、成績優秀だと聞いた。さっそく手際のいいところを見せたいわけだな」

「でも、まだまだ肅清は必要よ。理論ばかりで実践の伴わない、そのくせ学歴を鼻にかけるような連中は、いるだけ邪魔」

「君は、モスクワでもっとも成績がよかったのは、拷問術だそうだな」

リヒャルトはにやりとした。

「社会主義理論の授業では居眠りばかりしていたとか」

「やめてよ」

貴代美は笑った。

「私は生まれつき、文字を読むと眠くなる病気にかかっている。それはともかく……」

真顔になって貴代美は続けた。

「肅清するにしても時間が必要よ。やりすぎると連中の疑念を招く。下手をすると私だって警察に売り飛ばされかねないのだから」

「そうなのか？」

「私を見るところでは、党にもぐりこんだスパイは二人や三人じゃないわ。いまスパイじゃない奴も、党がここまで窮乏している現状では、金をちらつかされれば簡単に当局に寝返りかねない。誰も信用できない状態よ」

「ひどいものだな」

「このままだと、どう考えても長続きはしないわ」

貴代美は肩をすくめ、「あのねえ、リヒャルト」と相手の顔を覗き込むように身を乗り出した。

「モスクワは、どういいうつもりでいるの？」

「何について？」

「日本の党についてよ。あなた、何か知っているんでしょ」

リヒャルトは無言だった。

「あなたは、上海で素晴らしいスパイ組織を作り上げた。そんなあなたを東京に寄越すということとは、日本の党の再建をあなたに託してのことではないの？」

「同志レーニンは……」

唐突にリヒャルトの口から漏れた、今は亡き「建国の父」の名に、貴代美は怪訝な顔になった。「革命を世界中に輸出することを夢見ていた。だが、実際に社会主義化したのは、今のところ、モスクワの北部だけだ」

「……」

「レーニンの遺志を引き継いだ同志スターリンは、今は農業集団化と重工業化を目指す五カ年計画遂行、すなわちソビエト連邦の基礎を固めることに専念している。他国の革命を支援する余裕は、今のモスクワにはない。同志スターリンが日本について思うことは、ひとつしかない。すなわち、満州に傀儡帝国を築いた日本軍国主義の圧力が、ソ満国境を越えてソ連に影響を及ぼすかどうかだけだ。私がモスクワから派遣されたのも、蒋介石の国民党政府より、軍国主義化する大日本帝国の動向を恐れていることだ」

「要するに……」

貴代美は苦笑して首を振った。

「日本の党は、モスクワから見放された……いえ、見捨てられたわけね」

「それは違う」

リヒャルトは立ち上がり、貴代美の左横に並んで座り、肩に右手をかけた。

「確かに同志スターリンは、君たちの党をあてにはしていない。言葉を変えれば、私にある程度の自由を与えてくれたということだ」

「どういいうこと？」

リヒャルトの腕が貴代美の背中に回された。貴代美は抵抗するふうもなく、なされるがままで

った。リヒャルトは、貴代美の耳にささやきかけるように言った。

「私は、この日本でも諜報組織を作り上げつつある。少数だが優秀な精鋭を集め、この国の中枢に食い込み、この国を自在に動かす組織を、だ。もちろん、ソビエト連邦の利益に添ってのことだがね……」

背中に回されたリヒャルトの右手は、貴代美の右の脇をくぐって、豊かな乳房をそっと包んだ。「正直、君の党の有象無象は、私には必要ない。むしろ邪魔な存在だ。だが、クトヴェで優秀な成績をおさめた君の力は、ぜひともほしい」

やわらかく乳房を愛撫されながら、貴代美は身じろぎもせず、面差しひとつ動かさなかった。リヒャルトは続けた。

「どうかね。そろそろ決心してくれないか」

そう言いつつ、右手を乳房から貴代美の股間へと這わせていたリヒャルトは、不意に息を呑んだ。貴代美の左手が、彼の陰囊をつかんでいた。

「それ以上、手を下にやったら、破裂させるわよ」

貴代美は微笑んで、リヒャルトを見やった。

「私は、右手でも、左手でも、あつという間に男性を去勢できるの」

リヒャルトは無言で、貴代美を見つめた。額から一筋、汗が落ちた。貴代美は笑った。

「女好きのあなたは、これを潰されたら、生きている甲斐もなくなるわね」

貴代美は手を離して立ち上がった。

「私はあなたに従うつもりはないわ。何時か、あなたと組むことになるかもしれないけれど、い

ずれにしても、もう少し待って」

ソファに座ったままのリヒャルトに背を向け、ドアに向かった貴代美は、ふと立ち止まり、振り向いて言った。

「将来、あなたに協力する時が来たら、ひとつ条件があるわ」

「なんだね？」

ハンカチで額の汗をふいて立ち上がり、リヒャルトは問うた。

「もう一人、あなたの仲間にしてほしい仲間がいる。優秀な人材なの」

「誰かね、それは？」

貴代美は目尻を細めて笑った。

「私と同じ同性愛者。男性の去勢にも手慣れた女性よ」

その頃。

江戸川べりの村野栄太郎の隠れ家。村野が寢室に使っている四畳半の部屋の隅に、猪俣佐和子は呆然と座り込んでいた。

部屋の中央に敷かれた布団の上で、村野は襦袢の胸をはだけさせ、大の字になっていた。白眼が剥かれ、開いた口から舌がはみだして垂れ下がっていた。股間の猿股が大きく膨れあがり、血が染みている。あばら骨が浮いた薄い胸は、微動だにしない。

やっちゃった……。

佐和子はよろよろと立ち上がった。村野にせがまれるまま、股間を踏みつけて、つい力が入っ

た。踵かかとの下で二つの肉塊が破裂し、村野は奇声をあげてのけぞり動かなくなった。胸に手を当ててみた。心臓は動きを止めていた。

どうしよう……。

声に出して眩くらきながら、佐和子は部屋を出て、台所に向かい、玄関の格子戸を開け、外に歩き出した。日は冲天ちゅうてんにあつてぎらぎらと舗装道路に照りつけ、湿気を帯びた熱が立ち上ってくるなか、全身から噴き出す汗を拭ぬぐいもせず、佐和子は歩いた。向かう先は貴代美の家。所番地は教えられていたが、無断で訪れることは禁じられていた。だが、党則にかまっている時ではない。

貴代美ちゃん……。

佐和子の眼から涙がこぼれ落ちた。

また、やつちやつた……。助けて……。

「これは、非常事態です」

右手で眼鏡の弦つづを神経質そうにいじり、左手でしきりと前髪をかきあげながら、中央委員の間は吐き出すように言った。

「中央委員長が急死し、ハウスキーパーは行方不明……。黨員に、なんと行って説明すればいいんですか？」

村野栄太郎が死体で発見されたのは、中央委員会が開かれて一週間後だった。江戸川べりの村野の家を連絡レホに訪れた清水が、いくら呼び鈴を鳴らしても誰も出てこず、あまつさえ異臭が室内から漂ってくるのに不審を抱いた。格子戸に手をかけると鍵もかかっていなかった。屋内に入る

と人けがない。探し回っているうちに、腐乱が始まった死体を発見したのである。佐和子の姿は消えていた。

清水は東京市内を駆け回り、中央委員をかき集めた。インテリ黨員の岩本と赤間、労働者出身の畑野、農民出身の小泉、そして貴代美。

一同が、村野の死体を囲んで茫然自失となるなか、てきばきと指示を出したのは貴代美だった。村野の急死と、猪俣佐和子の逡ちくでん電の因果関係は分からない。だが、もし世間に漏れれば、銀行ギャング事件どころの騒ぎではない。警察も捜査に乗り出すだろう。まずは、村野の死を隠蔽いんぺいするしかない。

そう言われて、顔を見合わせるばかりの男たちに、貴代美は沈着に言い放った。

「あたいの言うとおりにしな」

男たちは従うしかなかった。清水さん、樽たると大八車たいはちぐるまを用意してきて。他の人たちは、村野さんを風呂場に運んで血を洗い流して。樽が来たら、そこに村野さんを入れておいて、暗くなった外に運び出しましょう。

男たちは、ハンカチや手ぬぐいで鼻をおおい、村野を運んだ。貴代美はてきばきと男たちに指示を出した。死体を家から運び出す際、近所に気づかれぬよう臭気を抑えるため、死体の足首を切断させ血を抜いた。岩本と赤間は嘔吐してしまい、役に立たなかった。清水が樽と大八車を用意して帰ってきた時は、すでに夕方だった。とりあえず村野の死体を樽に入れ、庭に置いた。

「黨員には、村野さんは病気で引退したことにしましょう」

作業を終え、肩で息をしながら六畳間にへばりこんだ男たちのなかで、いくぶん冷静さを保つ

ていたのは畑野達男だけだった。

「それから、何をさておいても後任の委員長を決めなければなりません」

「そりゃあ、岩本先生だ」

小泉がすかさず声をあげた。代々、「党」の中央委員長は帝国大学卒業生が就任するならわしになっており、現在の委員の中から選ぶとなると、岩本か赤間しかない。年長であり、黨員歴も長い岩本が委員長となるのは、順当な人事だった。

「どうですか、皆さん」

畑野は委員たちを見廻した。男たちは頷いた。やや離れて煙草を吸っている貴代美に、畑野が、飯島さんはいかがですか？ と訊ねたとき、岩本の面差しが一瞬引きつった。

貴代美は灰皿に煙草を揉み潰し、顔をあげて岩本を見た。唇の端がわずかにつり上がった。岩本は怯えたように眼を逸らした。

「あたいは、それでいいよ」

貴代美は笑顔で言った。では拍手を。畑野に促され、委員たちは手を叩き、岩本は正座して頭を下げた。

「委員の補充はしないんですか？」

赤間が言った。中央委員は、委員長を含め奇数でなければならぬ。現時点では六人で、一人足りないのだ。

「補充するのなら、推薦したい人がいるのだが……」

言葉が続けようとする赤間を、畑野は「それはまずいです」と遮った。村野の死、そしてハ

ウスキーパーの出奔を知っているのは、今ここにいる六人。この秘密は守らなければならない。自分、事情を知らぬ者を中央委員に入れないほうがいい。訥々と述べる畑野に、委員たちは口を挟めなかった。畑野は、人に耳を傾けさせる雰囲気を生まれつき持っていた。畑野が語り終わるのを待って、赤間と小泉が、しかし規則だから……と小さな声で言い合った。

「なんならさア」

貴代美が口を開いた。

「あたいが抜けようか？」

それで五人になるじゃないか、と言いかけたが「それは困ります」と清水が、庭の樽に目を遣った。精魂尽き果てた男たちは、眉ひとつ動かさず男たちを指揮して死体の「処理」をやつてのけた貴代美に頼り切っていた。岩本や赤間ですら、貴代美に今抜けられたら困ると懇願するような眼を向けてきた。

「わかった」

貴代美は立ち上がり、岩本を見つめて言った。

「岩本さん、提案だけ……」

岩本は、提案の内容を聞く前に、狼狽を隠すように顎を動かして頷いた。

「この家は、あたいが引き払っておくよ」

村野の家は借家だった。貸し主に事情を説明し、引き払ったほうがいい。それでいい？ そう言われ、岩本は首肯した。貴代美は続けた。

「清水くんと小泉くんは、村野さんをよろしく。適当なところに埋めといてね」

小泉が異議を唱えるより早く、清水は「わかった」と頷いた。

「それから、次の中央委員会だけど、九月半ばくらいでいいんじゃないかな」

二ヶ月後である。そんなに空けるのか、と赤間が弱々しく抗議したが、貴代美は言った。

「だって今、党はずつかからかんなんだろ？ 金もないのに額寄せ合つて相談ぶつても、なんにも

決まらないし、決めてもできやしないよ」

赤間は、岩本を見やった。女工上がりに仕切られていいのか、と言わんばかりの面差しをつくつたが、岩本は目を伏せるばかりだった。貴代美は構わず、畑野のほうを向き、二ヶ月あれば資金調達の目処はたつかな？ と問うた。畑野は、そのくらいあれば、と答えた。

二時間後。

湯島明神近くの路地は、夜店が並び、浴衣姿の通行人が往来していた。

「これ、ちょうだい」

館ん棒を二本買って、貴代美が向かったのは、路地の奥にある平屋の民家だった。ただいまアと格子戸を開け、玄関に入ると暗闇から走ってきて抱きついたのは、猪俣佐和子だった。しがみついて嘔び泣く佐和子の頭を撫でながら貴代美は言った。

「大丈夫、ぜんぶ片づいたから」